

トヨタ財団助成対象者 報告フォーラム  
「地域を知る－市民調査の可能性」  
第三部 地域を知る、地域をつくる

総合討論

## 「自ら責任がもてる地域をつくるための調査とは」

司会：崎山正美（循環型社会研究会）、宮城能彦（沖縄大学地域研究所）

崎 山： それでは、これから総合討論を始めます。今回のトヨタ財団助成の報告会では、自然科学の(司会) 分野から文化の面までかなり多岐にわたるレポートがありましたけど、私も沖縄でこういういろんな報告会を聞いておりますが、一日にしてこうもいろんな分野の話が聞けたというのは滅多にないことでありまして、沖縄に住みながら非常に幅広い研究が行われているんだなということを変更して実感いたしました。自分たちもいろんな活動をしておきながら、よその分野をなかなか聞けないということがありますが、それが今回のこの企画ではできたということは非常に大きな成果だったと思います。そこで、そういうことを聞きながらこれから討論を深めていきたいと思えます。

先ほど嘉田先生の報告の中に、写真家の前野さんが「色がなくなった。もう自分は琵琶湖の写真を撮れない」という話がありましたけど、それは私たちがこの沖縄に住んでいて、ちょっと似たような実感を持ちつつあるのではないのでしょうか、ということをお私はずごく感じました。沖縄のイメージというのは観光産業を中心にして、いろんなイメージがつくられておりますけど、そのイメージというのは本当に私たちが一私たちがというのは誰でしょう—例えば50年前の沖縄の姿なのだろうか、ということをお常に思うんですね。おそらく50代以上の方は、沖縄のこの変化のあり方に対してすごく危機感を感じていると思うんですね。今回のレポートの中でも、そういうあまりにも急激な変化に対しての危機感から、調査に臨んだという方もずいぶんいらっしゃったと思えます。

そこで、今日の討論では、まず、仮説的に私、4点ぐらい考えております。一番目は「沖縄の暮らしの変化」について語り合いたい。二番目に「内と外から見えるもの、見えないもの」について語りたい。三番目に「調査の楽しみと信頼」ということについて語りたいと思えます。最後に「調査を地域にどう還元するか」というところ。この4点について討論していきたいと思えます。これは仮説ですから、これからさらに新しいテーマが出るかもしれませんが、まずはその流れでやっていきたいと思えます。

## 1. 沖縄の暮らしの変化

崎 山： そこで、一番目に「沖縄の暮らしの変化」というところで話していただきたいと思えますが、(司会) いわゆる沖縄の暮らしの変化の激しさというのは、日本も戦争を経て、高度経済成長をして、非常に激しい変化があったわけですけど、それ以上に沖縄の変化は激しい。私たちは親の世代から自分たちの世代、あるいは子の世代につなげるということがすごくできていないのではないのかなと思えます。それは特に、かつての生活の知識というのを受け継ぐ、つなげるというところで、かなり難しい時間に来ているというのが私は沖縄の社会ではないかと思えます。特に戦災記録であるとか、地域誌をつくる方々はそれを非常に感じていると思えます。例えば生活の実態としての記録は今、取らないと、もう取れない。語る人がいなくなっていくという瀬戸際にあるはずなのです。いわゆる字誌とか、いろんな市町村誌をつくる非常に難しい時期なのです。私も今、糸満誌の編集に関わっておりますけど、来年行くと、もうこの人がいないという状況がずいぶんあるんですね。その辺の変化の問題を地域誌とか、あるいは琉球の紙の研究をやっている方々を中心に語っていただけないかなと思えますけど、どうでしょうか。

まず、沖縄は戦争ということがあって、いろんな記録が失われましたね。そういう記録がない。ましてや嘉田先生がお見せになった写真の記録の中で、定点観測的なものとなる戦前の資料が非常に少ないといういろんな難しい場面がありますが、例えば南風原町の文化センターであるとか、その辺の方々はその辺のことについてはどうお考えでしょうか、あるいはどうい

う課題があるのでしょうか。ちょっとお聞かせ願えませんでしょうか。

平 良： 南風原文化センターの平良です。調査する時の調査者が亡くなっていかれるとか、そういうことでしょうか。

崎 山： それも含めて、記録をする時のいわゆる「今」という時間の問題ですよな。  
(司会)

平 良： 南風原文化センターには南風原町市民資料室というのがあるんですが、町市民資料室では各分野に分けて調査を重ねて発刊物を発刊するというをしています。やはり時間がかかるといふことと、調査をしたい人、調査をしたいものが残っているかということに対しての難しさはどっこも一緒だと思います。96年ぐらいだったと思いますが、南風原町市民資料室と文化センターで、成果も含めて目に見える形でということで考えた字展というのをやったのです。そういう方法は非常に私たちとして新しいやり方をやってみる挑戦だったのです。普通、分野ごとにその分野について詳しい方に会いに行き、実態を調べてごようということで調査をします。例えば調査員が別の職場の人だったりとか、大学の先生だったりすると時間がかかったり、難しさがあつたのですが、文化センターの事業として各字の公民館を使って、そこで字の総合展と同時に総合的な調査をすることで、いろんな分野を一気に調査した情報の交換ができたり、今までわかっている調査を皆さんに公表したりということで、一気にできる方法じゃないかなという取り組みを始めてみました。

これもきっかけになったものは、沖縄市の文化財の担当の方が文化財を紹介したいという時に動かせない文化財、例えば天然記念物ですとか、施設ですとか、それを博物館に運ぶことができないので、それがあつる場所に出向いて行って、そこで紹介するというのをやったという話を聞いた時に思いついたことだったのです。例えば字の戦災調査ですとか、民俗調査とか、知りたいことを個別に何回も行って、同じ人に何回も聞いたりとかするよりも、一気にやろうということで、手始めに神里というところでやりました。それを取り組む時には役場の職員ですとか、農協の職員ですとか声をかけて、一緒に協力してくださいということを言いますが、始まってからは公民館に一週間から十日ぐらい私たちが出勤してやりました。その間に、例えば「神里を語る会」と「歩く会」というのを入れました。そういう各字の公民館でやることで、私たちが会えなかつた人たちが自然に足を向けてくれたりとかしましたので、おうちに残つてお宝みたいな写真ですとか、貴重なものとかもどんどん気安く自分の字の公民館には持ってきてくれましたので、情報交換が非常にスムーズにいったということはありません。ただ、それをちゃんと記録に残す作業の段階までいかないうちに字展を進めてきたこともあつたのですが、それも一つの方法かなと思います。今は、まだ半分の字しか終わっていないので、今後続けていけたらという段階です。

自分たちは博物館のある町なので、そこで何でもやっつてしまおうということではなくて、字の公民館に行くことで、もっとその字の人たちが近くなつたし、私たちが教えてもらうことがたくさんあつたり、自分たちがここまでしか知らない、ここまでしか調べてないということを見せることで、欲しい情報が手に入ってくるというか、そういうことを少し南風原で試しにできたかなあということなんです。

崎 山： どうもありがとうございます。では、自然の分野で、藤井さんにお聞きしたいんですけど、  
(司会) 泡瀬の干潟というのは、ずっと以前から泡瀬を生活の場として利用している人々がまだいらつ

しゃるんですね。例えばイイダコかな、タコを釣っている人とか、そういう人がいますけど、その泡瀬の干潟を生活に利用している知恵というのは、泡瀬に住んでいる人々にその暮らしぶりというのは理解されているのかどうか、その辺はどうなんですかね。あるいはそういう知恵が伝わっているのか。

藤井： 継続性ということに関しては違うことも、もしかしたらあるかもしれませんが。ただ、今でもそこで生業としてとまで言えるかどうかわかりませんが、貝をとって、例えば大潮の時に必ず行ってとってきて、それを売っている。また、それを買う人もいるというのは今でも泡瀬にはあります。ただ、地元の人たち、今、泡瀬にいる人たちがそれをやっているのかというと、必ずしも全部が全部そうでもないのかなという気がします。だからそこで暮らしている人たちがいつも干潟に行って、みんながそこで干潟に関わっているかということとそうでもなくて、特定の人たちが関わっているということはあるのかもしれません。ただ、もう一方で、そこに干潟がある。そういう自然がいつもあって、それを見ているという子どもたちとか、そこで育っている人たちにとっては、また違った意味で関わりがあるんじゃないかなと思うんです。

崎山： 今の質問の投げかけは、昨日でしたか、嘉田先生の新聞投稿に「大事なものは見えない」と(司会)いうタイトルがありましたけど、僕たちは沖縄の自然を誇りにしながらも、沖縄の自然の本当の姿というのを意外と知らないという実態があると思うんです。なぜそういうことを申し上げるかと言いますと、例えば実は私は糸満ですけど、糸満から那覇空港にかけて広がる大きな干潟、あれは泡瀬の干潟の比じゃないぐらいの大きな干潟でありまして、それが糸満の漁業の町としての発展を支えたものだったのです。その干潟は西崎の埋め立てによってまず半分つぶされて、今、豊見城の豊崎という埋め立てでほとんどなくなりましたけれども、あの干潟の埋め立ての計画があった時に、こういう言い方をされたことがあります。干潟って大体泥で灰色で黒くて、見た目にいい色ではないんです。私の会社の上司はこう言ったわけです。「あんな汚いの早く埋めちゃえばいいんじゃないの。土地利用すればいいでしょう」と。それはべつに意地悪な発言じゃなくして、彼なりの本心からの評価だったと思うんです。

たぶんそれは私たちが沖縄の自然とか、文化というのをちゃんと教えられてなかった。いわゆる戦後の教育の問題があると思うんです。50代以上の方は学校で沖縄のことを教えられなかったですよ。辛うじて『琉球の歴史』という副読本がありましたけど、あれは副読本として勝手に買っているだけであって、ほとんど教えられなかったということがあります。ですから、実は私たちの中に沖縄の姿が整理されて伝えられてないという事実があると思うんです。それをどうするのか。それはたぶん今、学校でも総合学習なんかを通じて頑張っているかもしれませんが、こういう市民調査の中でもそれを今、掘り起こそうとしている努力をしていると思うんです。その辺がたくさんの方が沖縄に入ってきましたけど、その研究成果はどこに反映されたのかというのは、最後にちょっと議論をしたいと思いますが、私はそういうこともあったと思います。

今、文化・社会面、あるいは自然面から、平良さんと藤井さんから現状を語っていただきましたけど、その点でいろいろご意見、こういうこと、というのはないでしょうか。どうぞ挙手で。砂川さん。

砂川： 藤井さんの話に少し付け加えます。私は沖縄市に実家があるわけですが、泡瀬干潟の運動とか、出かけるようになって初めて知ったのは、実はあの干潟で遊んでいるとか、来て何かとったりする人は屋慶名の人とか、あとは島、石垣とか、そういう海と関わりが強い地域

の人が海の面白さを知っていて、そこに出かけて行っているということを知りました。むしろ泡瀬の近くに住んでいる人たちは、海に行ったら棒をもって叩かれた。だから海には親が行かせなかったということです。私は育ちが石垣島なので、沖縄の人はみんな海に行くんだとずっと思っていたのです。私の幼児体験としては、おじいさんとかに海に連れられて、どこにも遊びに行くところがなかったので、海で遊んで帰ってきた。

だから泡瀬の干潟に初めて足を踏み入れた時に、あ、こんな海が近くにあるんだなあと非常に驚いたんですけども、そういう学校で学んだということよりも、むしろ世代間で生活の中で感じ取ってきたもの、感覚的にここは残さなきゃいけないと。特にどういう視点から…。調査を友だちとやりますが、私たちの地域のよく一緒にやる人たちは、食べられるものを取りに行くというのがあるんです。ハボウキガイという貝があって、その中に貝柱があるんですけども、私がいっぱいとりそうとすると、貝の専門家の友だちに「これは絶滅危惧種なんだよ。だから二個見たら一個は諦めなさい」と言われて、そんなこと言うなよ、と思うんですけど、ああ、そうなんだと思ってやっていくわけなんですね。そこにはやっぱり必要だから守る、ジョウトウだから取っておく。お母さんたちに話をする時も「あんなにものがとれる海をわざわざ埋めるかねえ」というような発想は、やっぱりそういったことをやった経験を持った人から出てきていて、沖縄の人すべてがそういう感覚なんだということは、私自身が泡瀬に関わるようになって、必ずしもそうでないということに気づかされたというのがありました。

崎 山： 琉球の服飾研究の植木さんなんかはどうですか、その時間性というのは。  
(司会)

植 木： 私は沖縄の服飾がどういう形であるのだろうかという興味から入っていったんです。そしてそれを調べるにはどうすればいいのかということから始まって、運良く沖縄には祝女という神殿の祭司がいて、その人たちは昔から保存してある古い衣装を大事に残しています。本当に今なら着ることができないボロになっているものでも捨てることができない。これを捨てると罰が当たる。ましてこれを納めてある櫃を神棚の上のようなところに置いてあるんですけど、その櫃に足を向けて眠っても罰が当たると。そういうような感覚がありまして、ボロになっているけど捨てられない。そういう衣類を発見しまして、発見するのもなかなか難しかったんですが、ちょっと様子がわかってきますと、やっぱり地元の方々と足繁く通ってスキンシップを重ねることによって、「実はうちにもこんなものがあるよ」とか、「うちにもこういうものがあるよ」というのは最初行った時は絶対に言ってくれないことを、三度、四度足繁く通って、世間話をして帰って、その次、「ああ、この前会いましたね。また来ましたよ」というふうに行くたびに新しいものが発見できる。古いんですけど、新たな発見ですね。

そして保管していらっしゃる方自身もその櫃のふたを開けることさえ、40年間開けたことがないというものを「じゃあ、私が開けていいですか」「はい、どうぞ」「じゃあ、私、開けましょうね」と、その本人の前でふたを開けて、中から取り出してみましたら、今から20年ほど前ですが、戦前から開けたことがないと言いますと、もうかれこれ7、80年も前から開けたことがない櫃を私が開けて、中からその衣装を取り出して、「広げてもよろしいですか」と言うので「どうぞ開けてください」と。自分は触ることはできない。あなたなら触ってください、というように、要するに恐怖感があるんですね。それを触るとなんか罰が当たるんじゃないかと。そういうことを「罰は当たらないです」というふうな言い方はできないんです。そのように大事にお持ちのものを調べさせてもらいますから、丁寧に調べさせてくださいと。

初めはどこどこにそういうものがあるということしか伝わってこないんです。一応、「あり

がありがとうございました。それじゃあ、今度それを調査するために準備してきますので、よろしくお願ひします」というようにきちっと頼むんです。頼んで、後で今度またそれなりの道具を持っていくわけです。例えばカメラだとか、定規だとか、そういうのを持って、「いつならできますか」ということを相談しまして、いつならできるという許可をもらって、また行くんです。ですからそれを調査させてもらいますのに、最低二回か三回目ぐらいによろやく調査できるというようなことです。そういうようなきものの中にはやはり大変貴重な素材がありまして、昨日もちょっとお話ししましたような、1センチ四方に縦横40本も渡っているような髪の毛ほどの細い芭蕉の糸、また1500年前後の中国の民代の刺繍の端切れがあったり、そういう珍しいものが出てきたわけです。

でも、それをお持ちになっている方は、それはいつ頃からそこにあつて、どういう人が着けていたというようなことを述べ伝えることができないんです。ですからそれを計測しまして、形のうえと材料のうえで、この材料の年代を推定する。私たちの推定ですから間違ふこともありますので、本当は科学的調査が必要なのですが、今、私たちの周囲には簡単に科学的調査をさせていただきます機関はありません。

崎 山： わかりました。ありがとうございました。

(司会) 沖縄の暮らしの変化ぶりと、その調査のタイミングというところをもうちょっとお話ししましょうか。

宮 城： 今、砂川さんがおっしゃってくれたことで非常に興味深いと思ったのは、泡瀬の人は海に出ると棒で叩かれて怒られたという話ですね。これは僕は非常に興味深いんです。というのは海のイメージが逆にだんだん画一化しているような感じで、沖縄の海は豊かで、みんな沖縄の海の豊かさで生活が支えられてきたと。でも、実は私も昨日報告していただいた羽地内海、田舎が向こうなものですから、夏休みはその羽地内海で過ごしていたんですけれども、毎年3月3日の大潮の日には親族総出でスヌイを取るんです。天然のモズクを1年分取って塩漬けにするんです。それからモーエ豆腐の材料を取って、1年分のモーエ豆腐材料を取って、あれは砂を取るのがものすごく大変なんです。そういう経験を僕らの世代までぎりぎりやっていますけれども、もう今やそういうことはできませんから、僕の子どもにはそれを伝えられない。

だから僕の印象としては、みんなが海に行つて楽しんでいたという印象はあるんですけど、でも、思い出してみると、うちの亡くなった祖父が明治36年生まれなんですけれども、僕はとっても尊敬していたんです。海へ行つて魚捕るの、ものすごく上手なんです。投げ網でパツと網一回で何十匹というチヌとか、ボラとかが捕れるんです。子どもなりにものすごく尊敬していたんですけれども、大人たちは冷たい目で見ているんです。あれは海へ行つて遊んでばかりいる、遊び人だと。だから僕の尊敬する祖父と、その祖父に対する周りの人たちの評価は180度違うんです。だからひょっとしたら海に出ることというのは、実は多くの地域でいけないこととされていたんじゃないかなあというのが僕の印象なのです。その辺はどうなんでしょうかね、いろいろ海の調査して。

藤 井： 泡瀬にこだわることになるけれども、実は泡瀬の調査をしているときに喜納昌吉さんのお母さんに会つて、お母さんが「あんたたち泡瀬の干潟、反対しているの。頑張つてね」という話をしたんです。何でもかという、自分はその海に世話になっている。自分たちが戦後、食べるものがない時にあの海がなかったら自分たちは昌吉も育てられなかったし、自分の子どもを育てられなかったという話をされたんです。だから今、砂川さんのいうどの年代なのかとか、ど

ういう状況なのかとか、もしかしたら本当に干潟に世話になったということも事実としてあるかもしれない。

今、僕は干潟の調査で入ってくると時間軸でかなり断片を見ていて、確かに来ている人たちは地元の人がどうもいなそうだなとかいうこともわかってくる。だけど、関わっている人もやっぱりいたわけで、やっぱりある時期には危ないから、もう海に行くなということも事実としてあって。だから逆にこの会場のどこかで、そういう時間軸でもう少し話ができる人がいるとつながるのかなという気がします。

三 輪： 今、大阪学院大学に勤めております三輪と申します。循環研で研究させていただいています。

私、大昔といいますか、20代の時にトヨタ財団から助成をいただいて、与那国島で200日ほど入って調べていたことがあるんです。

その頃に浦崎栄昇さんというどんなところにも出てくる大先輩がいらっしゃって、私が通い始めた時にもう80近くて、行くたびにその方も来るんですが、その方の記憶というのは猛烈に明晰なんです。だから調査者は大体浦崎栄昇さんのところを訪れる。

その方の明晰性というのは、ご自身が語り出すと本当にその現場にいるように語ってくださるんです。「あの岬にはオランダの船が着いてね」とか。ところが、それは何年だったとか、ちょっとその辺のことになってくると史実と伝承とか入り交じっているんです。ただ、ご自身の生きられた年代については、一九何年の何月何日何があったと、こういう形ですと出てくるんです。僕はその方の話を聞いていて、ところが、その人を先輩と呼んでいる当時60歳ぐらいの人で、今もし生きていたら80ぐらいの人です。その方々のところから突然記憶が薄くなってくるんです。それを見ていて、その人の年代によって入っている情報のあり方が全然違う、というような感じをすごく受けたんです。

というのは、浦崎栄昇さんの場合は、きっと外部からそんなに情報が入ってこない。だからいつもいつも自分たちで復唱しながら伝承を深めておられたような、そんな感じがするんです。ところが、その次の方々は外部とも非常に活発な時に育ってこられた。そんなことが影響しているのかなと思ったんです。沖縄ではそういう方々がどんどん消えているわけですね。ですから昔のことがわかる方がどんどん消えているのが現状じゃないかなと。

それを今から20年前に非常に感じていたんです。ですから今の80~90の方でも追いつかないような情報が、実はその昔あったんじゃないかなという風に思うんです。そんなことで今の話に関係するかもしれません。

それともう一つは、嘉田先生のお話を聞いて、それと今の干潟の運動の話を聞いていて、やっぱりもうちょっと丹念に海に入るといふことと併せて、陸（おか）の方に聞いてみるというのがすごく大事な感じがいたしました。かつてその久部良におりました時に学生に沿岸調査をさせまして、誰が何時間、どこでどんなことをしているかという調査を演習課題でやっていたんですけど、それは志としてはもっと誰がどんな気持ちで使っているかとかやりたかったんですけど、転勤しましたのでできなくなったんですが、やっぱりもっと先ほどの棒で殴られて行くと言われた。それは一体なぜなのかとか、その辺のことまで、それは良いとか悪いとかじゃなくて、どんなふうにつえられていたかということ忠実に掘り起こしていく作業、それもこの10年ぐらいが限度かなと。そんな感じがいたしました。

崎 山： 今、三輪さんの話の中に海と陸の関係という話がありましたから、司会者としてでなくて、(司会) 私も個人的に事例を申し上げます。今、沖縄のいろんな研究があつて、いろんな点的知識はあるんだけど、それが生活空間としての体系化されているような表現がどうもないような気がす

るんです。そういうことは常々感じるんですけど、実は昔の人はちゃんと海と陸の関係を知っていた。というのは、僕、糸満の事例からすごく感じたことがあります。糸満の喜屋武という集落がありますね。本島の最南端です。これは石灰岩台地で、干ばつが来ると必ずそこからサトウキビの被害が現れます。いわゆるロール現象と言って、サトウキビの葉っぱが巻いてくるのは必ず喜屋武から一番です。昔から干ばつに対してすごく苦しめられたところであるんです。その喜屋武の部落に「カマサーウガン」という行事があるんです。これは9月ぐらいですか、カマサー何とかという拝所があって、そこにカマスを備えるという行事なんです。それはなぜそういうことになったのと聞きましたら、実は昔々、大干ばつがあって食べるものがなくなって、台地から緑が消えていった。その時に自分たちは喜屋武の海岸にあるカマサーつば、きつと深みがあるんですね。そこでカマスをとって飢えを凌いだという言い伝えがあるわけです。

それを聞きますと、ちゃんと見事に陸の人というのは海との関係を知っているわけです。それとそういうふうな空間な取り方というのは読谷村の字を調べてみますと、山のほうと海のほうをセットにして字域というのをみんなちゃんをつくっています。そういういわゆる空間の単位をちゃんと持っているわけです。水源地である山とその下流の海というのをちゃんと持っています。そういうことが昔から実は生活の知恵としてあった。糸満の場合は、どうしても海がないところは、海を持たない集落の人が海を使える何とか何とか浜という権利を認めているところがあります。そういうふうな関係がずいぶんあったのだけど、それがだんだん自分たちの世代の中に伝えられていないですね。そういうことをもうちょっと調べていく必要があるかと思いました。

男 性： ごみの問題でもあるんですけど、今日の嘉田先生のご発言に本当に敬服したんですが、でも考えてみたら、琵琶湖というのは600平方キロですか、沖縄本島というのは1200平方キロなんです。ですから琵琶湖の倍が陸地になっているので、嘉田先生ぐらいに精力的にやれば、5年か10年ぐらいで生活者の実態とかわかるのかなとちょっと思ったのですが、いかがでしょうか。

嘉 田： 皆さんがここにこれだけおられるのは出発点じゃないですか。それから網羅的にすべての字を調べましょうとか、1キロメッシュで全部のところやりましょうとか、その気になったらこれだけのエネルギーがおられるし。

ただ、重要なのは、今日申し上げられなかったんですけど、事務局機能です。呼びかけて、みんな調査までは面白いからやるんですよ。あとのまとめをやれない。ホテルの調査でも私たちは事務局専門で10年やりましたし、今でも事務局やっているんです。ですからいろいろデータが来ると、どうやって整理するかという整理事務ばかりやっているんですが、事務局機能をどううまくきちんとつくっていくかということが、参加した人たちは自分がやったことが生きている。あ、こんな報告書になっているとか、こんな記事になっているとか。しかも、私たちのホテルの報告書は1ページ目に全員の名前を入れる。1500人の名前だけ入れるとか、徹底して。たぶんこれを受け取ったときに自分の名前をみんな探すだろうと。ただし、匿名という人は最初から匿名にします。というようなことで、どうやって整理して、次にお出するのとか。徹底して本をつくり、事務局としてお返しをしてきた結果が琵琶湖博物館なのです。ですから事務局機能さえちゃんとやったら沖縄全域、全シマ調査というのがかなりできてきて、楽しいんじゃないのかなと思うんです。

それからもう一つ、先ほどの何を食べるか、食べないかですが、これはかなり文化的なものです。それで「資源としてあるのに食べないのはもったいない」といっくらよそ者が言っても、食べないものは食べません。琵琶湖周辺でもほとんどの種類をすべて食べるんですが、ピワコ



オオナマズだけは絶対食べない。それは「弁天さんの使いだから食べたら罰が当たります」と。それとやっぱり脂分が多いからあまりよくないとかあるのかもしれませんが、今、マラウイ湖というところに行っているんですけど、そこはもっと徹底しています。本当に食べるものが宗派によって違うんですね。ですから食べるということは大変大事な文化で、しかも自然界にあるものを我が身に入れて安心と思うのはずいぶんと壁があるはずですよ。ですから食べないという実態をまず調べ、食べないのはおかしいとか言うのではなくて、とにかく食べないというのをなぜ食べないのかを実態を調べる、教えてもらうという、その辺が出発点じゃないかしら。その理由を聞いていくといろいろ楽しいと思います。それつまり文化の多義性ということになってくるのでしょうか。

宮 城： 沖縄国際大学の宮城です。

(沖国) 先ほどから海のことをちょっと話されていますので、少しそのことと、それから嘉田先生が先ほど琵琶湖のことでおっしゃっていたんですが、使われなくなると汚れてしまうとか、汚れてしまうと使われなくなる。僕は泡瀬の干潟なども、結局はそういうことと関係しているんじゃないかなと思うんです。本来、泡瀬の場合は戦前まで塩田などがあった塩をつくっていたりしたところなんです。ところが、それが戦後、全部壊滅します。その後、結局は海とその周辺に住んでいた人々との生活が分離していくわけです。そして使わなくなってくるとどんどん海への関心であるとか、そういったものが途切れてしまう。これは羽地内海の場合も古くは塩田があったりしたところだと思うんですが、結局、その塩をつくるという生業がなくなっていくと海への人々の関心というのは全部消失していくのです。

これは実は今、海のことではなくて、もう一つ言うと、この中南部は湧水、嘉田先生はカキのことも話されておりましたけれども、中南部の湧水は今、生活用水として使われている湧水がものすごく少ないんです。ほとんど全部、上水道に変わっておりますが、こういうふうに昔の伝統的な暮らし、あるいは自分たちの地域にある資源をどう活用していくかということを実はもう一度、活用プロセス、それは例えば生活用水としては使えないかもしれないけれども、例えば子どもたちの遊びの場であるとか、あるいは何か我々おとなたちが、これはあまりよくないかもわかりませんが、ときどき集まって、そこで毛遊びをするぐらいの気持ちで、そういう空間を活用していくようになれば、やっぱり自分たちの地域にある自然と言いますか、そういったものに対する関心のようなものが、もう一度高まっていくのかなあというような気がします。

それとこれは若い皆さんもたくさんおられますので、私が言うのもなんですが、やっぱりもっとも自分たちの足元にいろんな関心を持っていただきたいなあというように思うんです。学生たちを連れて、すぐ近くに行きますが、例えば嘉数高台公園というところがあるんです。ここは沖縄戦で非常に激戦地になったところなんです、そこに学生たちを連れて行っても、そこから見える普天間の飛行場を見ながら、「あ、きれいねえ！」というところでひょっとしたら終わるといふところがあるんですね。そこを一步進めて、子どもたちにその事実を伝えていくというのは、たぶん私たちの責任でもあるんだろうなあと思っています。

今日、嘉田先生のお話、それから昨日からのいろいろな発表をしていただいた皆さんから非常にたくさんの情報を得ることができましたので、私ももう一度自分の足元を、毎日ちょっと千鳥足状態ではあるんですが、しっかりと見つめ直して、自分たちがよって立つ地域とは何かということをもう一度考える機会にしていきたいなと。そんなことを考えました。

比 嘉：(地域研究所)

海のことを80歳以上の人に聞きなさいというのは間違いです。私はやがて70ですけども、私は漁師の子どもです。糸満で育ちました。私の親類は粟国島とかにいますけれども、やっぱり海とのつながりを子どもの頃からどう教えるかという問題。すなわち私たちが子どものころはカバンを放り投げて、とにかく海に行ったんですよ。ただ、そういう遊びは今の学校教育は禁じているでしょう。そういう遊びの場としての海、それをどう認識させるか。いわゆる学校教育に閉じ込めてしまう今の問題。地域を学ぶというのはおとなじゃなくて、子どもの遊び場としての地域、海というものを認識させることから始めるべきだろうと僕は思います。

もう一つは、これは宮古もそうですし、沖縄の海辺の村みんなそうです。海の名前があるんです。海は海じゃなくて、海は畑なのです。そういう発想がみんなあったわけです。

私の母の従兄弟が粟国島におりまして、そのオバチャンは粟国島の海岸に自分たちしか知らないタコの穴を持っているわけです。そして朝行ってとってくる。また入る。沖縄はタコツボじゃないんです。サンゴ礁にタコが入っていますから、それを押さえておけばいつでもとれる。冷蔵庫じゃなくて、生きた冷蔵庫が海にあるわけです。

そういう形での沖縄の人たちの知恵があったはずなのに、私の子どもの頃は海に行くと足で揉んだだけでエビが出てきた。そういう海がなくなったということが子どもたちを海に行かせない状況になっているわけですけれども、例えばサンゴ礁、今日はいわゆる濁といいますか、私たちはイナオと呼んでいますけれども、そこへ行きますと深くないものですから、大体気温が11度ぐらいになりますと、うちの親父は「政夫、海に行きなさい。魚が浮いているはずだ」と。寒さで浮くわけです。これを我々はヒルクイーと言っていたんです。そういう豊かな海、寒くなると魚が浮いた豊かな海がなくなったからこ子どもたちが行かなくなった。

私なんかはよく海に潜っていました。ゴーグルを付けずに、すぐ家の後ろの海に潜っても平気でした。たけど、今、ゴーグルを付けないとヤバイ、ヤバイと言うんです。いわゆる海の汚染等で魚が捕れなくなったこと、遊び場としての認識がなくなったこと、そういうこと自体がいわゆる海を含めた村という一つの認識が、我々の社会からなくなったのだろうというふうに思うんです。そういうことはいろんな形で循環的にあるだろうと思うんですけれども、それをどう取り戻すかということをお我々は考えるべきだろうと思うんです。

砂 川： 今、湧水の話も出たんですけども、前に恩納村の方と話をした時に昔は簡易水道を使っていたんだけど、衛生的に良くないということで上水を使うようになったということをお言いました。でも、まだ上水というのがより良いという価値であるとか、あるいは例えば学校でどういう人になるのが偉いと教えるか。例えばよく今、学生は良い学校に行って公務員とかになるのが夢だと言うんですけど、そういうのが本当の価値かどうか。誰によってつくられた価値をお私たちが価値だと信じているのか、あるいは自分で認めているのか。この価値というのは非常に意味があるんじゃないかなと思います。

宮 城： ずっと海のイメージとか、海の実態とかって話していますけれども、同時にここに来ている(司会) 皆さんは活動なされていて、例えば泡瀬でも子どもたちに調査に加わってもらって一緒にやっていますよね。今度は受け継ぐと同時に自分たちを受け継いでもらう子どもたちの育成というか、一緒にやっていくというか、そういう活動をなされていると思うんですけども、一つ疑問が私はあるんです。子どもたちに関心を持ってもらうのがなかなか大変だという話をよく聞きますけれども、実際に参加している子どもたちというのはどういう子なんだろうか。

というのは、例えばうちの親は何も意識しなかったけれども、僕は海に関わって育ってきま

した。けれども、私は自分の子どもに、意識的にじゃないと海に関わらせられないんです。普通、何気なく生活していたらせいぜいちょっと泳ぎに行くぐらいです。かなり意識して、僕が祖父を尊敬したあの感激を何とか少しでも自分の子どもにも伝えたい。でも、これは私自身がこういう職業で、こういう勉強をしていて、かなり意識的だから自分の子どもに伝えたいと思うのであって、ひょっとしたらかなり意識のある家庭の子だけにこういうのが受け継がれているんじゃないのか、どうなんだろうと。だから逆にどんどんこういうものを引き継ぐ子たちを限定していつてしまう。分化させているんじゃないか。そういうところはあるのかないのか、どうなんでしょう。

藤井： 運動しているというよりも、今、僕は仕事として子どもの研修施設にいます。それから観測会とか、子どもたちを連れて行くことが多いんですけど、その時に感じるのは、子どもたちがいっぱい関わってくれて良いなあと思う反面、これで良いのかなというのには同時にあります。例えば今、僕がいる施設に来て自然体験をする。例えばバッタなんか捕るのもそこに来てするんです。初めてバッタ捕ったと。「よかったねえ」と言うけど、「次またバッタ捕りに来るね」と言われた時に、いや、ここに来なくても、そんなことはできるんだよ、というのがあって、もしかしたらそれと同じことを例えば観察会で僕らが連れて行って、海に行って自然体験して、家族と行って楽しかったと。本当は「また次は家族で来てね」と言うんだけど、「また来ます」と言われた時に、自分で行ったほうが良いのに、何でこういうことが伝わらないんだろうなというもどかしさは確かにある。

玉寄： 沖縄県子ども会です。玉寄哲永と申します。簡単に5点ばかり申し上げます。

まず、泡瀬の干潟に参加した子どもたちの反応を聞いてみました。これは周辺の子ども会から聞きました。そうしましたら最初、そこに足を踏み入れたらブルンとした、気味悪かった。ところが、実際にそこら辺を見ているとたくさんの生きものがいたんだなああと初めてわかったと。こういう反応であります。

2点目は、具志頭村の港川、あそこには伝統漁法があって、ヒータマラサーという。これは何かというと干潮時に網を張って、満潮時にそれをすくい上げる。その漁法を港川の漁師の方が子どもたちに教える良い機会だと。

多良間村のほうは四つの筋を通して、四つの地域の子ども会がある。それを支えるおとなたちが釣りを教える。よく釣れるんだそうです。そういうことで子どもたちは大変な興味がその海周辺にあります。

名護の子ども会の会長は沖縄の表現で言うとウミンチューなんです。実はずっと瀬嵩の海岸で一泊二日周辺で研修をして、そしてあそこのウミガメの産卵、これも掘り当てて見せる。それから沖合に行って何をとってきたかという、子どもたちがシャコガイをとりたいた。そしてそれが新聞に載りましたら、翌日は県のほうから苦情が出て、あれはとっちゃいかんと。ところが、市場にはだいたい売られているんです。

もう一つ、東風平というのは周辺に海がありません。具志頭村には海があります。合同の研修を具志頭村のサザンビーチでやりました。そうしましたら翌日釣りへ行く。ところが、釣りのエサが何だったかというヤドカリ。そうすると東風平の男の子が「これにどうして釣り針引っかけると。具志頭村の女の子は体験がある。で、何を言い出したかという「これ簡単だよ。割ってシッポに付ければいいさあ」。こんな違いがあるんです。こういうふうにして子どもたちは触れ合うきっかけをつくらなければ、子どもの世界なんて何一つ始まらない。それをある程度きっかけづくりをしながら親しませる。そういうのが実は地域に目を向けさせる

きっかけになるんじゃないかなあとということです。以上です。

上 田： 大阪の取り組みで恐縮なんですけど、子どもはたぶん世界共通だからちょっと聞いてください。

私、子どもたちと調査を始めて7年になります。調査とあんまり言わんほうが良いのかもしれませんが、私が大事にしてきたのは、一つは「子どもはすごい調査員や」と私は思い込むことにしています。ものすごく専門性を持った調査員やと思う。私は何も調べられませんが、僕の思い込みがまず一番それがあるということ。というのは彼らの目の高さ、それから素早い動き、それからこだわって突っ込んでいくあの迫力、これは誰にも真似できません。子どもは素晴らしい調査員やと僕はいつも思う。その子どもたちが準絶滅危惧種であるハクセンシオマネキを西淀川で発見しました。これは子どもたちの見事な成果だと思っています。

もう一つは、とにかくやることです。あんまりそれ以外に考えていない。まず、子どもたちと一緒にやる。子どもは水と火が大好きです。だから私自身がやってきた取り組みの中に水と接するというのと、火を使うということをかなりこだわってやりました。だから冬行って寒いのに子どもらは半袖で、沖縄は寒い体験できへんでしょうけど、大阪はわりと寒いので火を焚いて、今度もごみを焼いて焼き芋をつくって、消防署から怒られましたけど、そういうこともやる。とにかく火と水を必ず組み合わせるということを僕なりに工夫したつもりです。

それと続ける。私はそういう知識があまりないので、記録は取りますけど、科学性は考えません。考えてもでけへんから考えません。だから記録はきちんと取りますけど、結果をあんまり気にしない。気にしてもでけへんからです。

とにかく続けるということと、やってみるということと、子どもは専門性を持った調査員やと信じるいう、この三つでやってきました。むちゃくちゃがむしゃらで方法論も何もないんですけど、それで今、続けています。

エピソードを一つだけ言うと、7年前に小っちゃなネコの額のような干潟を観察に行った子どもが今年、近くの居酒屋でアルバイトをしまして、私も嫌いなほうじゃないですから、お店に入ったら「おっちゃんまだ続けてる？」言うから、「まだ行ってるでえ」「一ぺん行きたいなあ」というふうに言うてくれました。そういうことが残るのが子どもとの調査と違うかなあと勝手に思っています。

## 2. 内と外から見えるもの、見えないもの

崎 山： どうもありがとうございました。話は発展してきましたけど、ここでちょっと話題を変えた(司会) と思います。

いろんな地域に入って調査をしていくわけですが、沖縄の場合ですと非常にいろんなテーマがありまして、まだまだ興味ある自然もいっぱいありますから、県内には既にいろんな方が、藤井さんもそうですけど、県外から来て定着してという方がずいぶんいらっしゃる。大体こういう調査に関わっている人の半分ぐらいは県外から来た人がリーダーになっている場合がありますね。例えば久茂地川の運動ですと、僕たちのメンバーの半分はほとんど県外から来た人でして、それは内から見えるもの、外から見えるものがたぶんあると思うんです。

そこでその内外の問題、人の問題を少し話をしたいと思いますが、いわゆる外から来る者にとって、この沖縄という地域、あるいは島というのはいろんな蓄積がありそうで、そこからいろんなことが聞けそうだと思うわけです。それは地域の人から聞けることがいっぱいあるというのが一つあるし、地域の人にはそれを蓄積はもちろんしているわけですが、ずっと地域に

住んでいますから、他との比較によるその価値の存在というのがよく見えないということがたぶんあると思うんです。その辺のことをどなたか話していただきたいということと、私たち循環研が地域に行って、いろんな話を聞こうとしますと、特に将来ビジョンを必要とするようなテーマであるとか、今、起きている社会摩擦みたいのがあるような地域ですと、本音と建前の区別が聞いていてなかなかよくわからないということがあつたりします。その辺のことをどなたか話せる方いらっしゃいませんか。ちょっと難しいから、みんな話しにくいですかね。

宮 城： いいですか。ちょっと話しやすい話題に。司会者同士で話題を奪い合ってもしょうがないの(司会) で、話題は変えませんが。

あんまりいい表現が思い浮かばないんですが、例えば社会運動をしている先生が、県外から来た先生だったんですけど、「俺たちがこんなに一生懸命やってるのに、沖縄の人、何してんだ」と言ったんです。僕はこの日からこの先生を軽蔑してしまつて。それはかなり極端な例なんですけど、僕は純粋なウチナンチューですから言えるんですけど、県外から来て、沖縄の人に対する良いとか悪いとかじゃなくて、齒がゆさみたいのがやっぱりどっかにあると思うんです。逆に沖縄の人は、何でよそからわざわざ来て、他人のどこやるの?という気持ちは僕もやっぱりどっかにあります。自分とこやれば良いのに、何でわざわざこんな南の島まで来てというのは僕もかなりあります。ただ、その一方では、でも自分たちでやれないから、来てくれてありがたい、という気持ちももちろんあります。今、かなり話しやすくするために誇張して言っているの、申しわけないのですけれども、何かそういうちょっと言いづらいところもあって、特に沖縄の人は一見おおらかそうで、本当は沖縄の人のここは駄目だよと言うと過剰反応するところがありますので、そういうのは皆さんもよく知っていると思うので、言いにくいとは思いますが、言える範囲で何か話してください。ただ、いきなりそういう軽くなつても困るので、崎山さんが言ったようなテーマに沿うような形で、よろしくお願いします。

藤 井： まず、一般論としては、やっぱり外から来たほうがものが見えるというのはどうしようもないことで、地域の中で良いものがわからないというさっきからの話でもそうです。そこにいたらたぶん見えてこないものが、傍目八目という言葉もあるように外から見たらわかる。特にこういう文化がわりと沖縄の文化というところによそから入ってくると、たぶん良いことも悪いこともまず見えてしまうというのは、これはどうしようもないことなのかなあというのがたぶんある。

ただ、何かしようと思う時に結構難しいのは、僕自身いろんなことをするたびにやっぱり思います。それは僕はわりと積極的に言ってしまうほうなので、そうするとついついこんなふうになればいいのにとか、何でこんなことしないんだろうとか、これはおかしいんじゃないのというのは出合うたびに言うということ。それは当たり前なだけけれども、その中にいる人たちはそれを見えていない。言われて気がつくんだけど、いちいちそこで言われると、どの世界だって矛盾を抱えているのが当たり前で、いちいちそんな矛盾を一つ一つ暴き出してしまふ。そうしてしまうのがたぶんよそから来た人の宿命なのかなと。それは逆に僕がたぶん沖縄じゃなくて、どこかの世界にいて、よそから来た人がいたら、その人はその社会の矛盾点にみんな気がついて、自分と違うということで全部チェックするので、たぶんそれはしょうがないのかなと。

ただ、どうしても僕は今、注意しないといけないと思うのは、そういう時にナイチャー同士でいると、そうだよ、そうだよ、そうだよ、というふうになりがちなので、それはやめようと。そうすると内地の人間とウチナンチューとなるから、波風立つても、それはウチナ

ンチャーの中で言って、それを共感することをあんまりナンチャー同士で、変だよ、変だよ、と言って盛り上がってもしょうがないので、できるだけその話は内地の人とはあんまりしないようにはしようというふうに自分では思っています

藤 本： 僕も兵庫県のほうからこっちに来たのですけれど、あちらから来るとこっちにいるものとはとても面白いです。生物好きの人間にとってはやめられません。特に石垣に希望して転勤しましたが、向こうにいと僕にとっては龍宮城にいるようなもので、宝の山の中にいるようなものです。地元の人は何でこの人はいつまでも学校に残っているんだ、何でそんなにフィールドばかり出ているんだと。生徒と一緒に深夜徘徊していますけれども、先生方は岬町という酒屋に深夜徘徊しに行きますが、僕は山のほうに行くんで、何でおまえだけあんなほうに行くんだ、と言われてます。

今日も文化の話と自然の話があったと思うんですけど、文化というのはこちらの方がずっと作り上げてきたものだと思うんです。やっぱり自分たちがつくったものはものすごく大切にされているんだなということがあって、石垣でも郷土芸能も盛んで、生徒から若い人まで全部できている。それに対して自然というものはもともと豊かで、それに育まれて自分らは恩恵を蒙っているのかもしれないけど、自分たちが何かつくったというものではないので、気づかない面がいろいろあると思うんです。僕らは逆にこんな豊かな自然がないところから来ましたから、とっても豊かだというのに気づくんですが、そこに非常にギャップが生まれてくるんじゃないかなあと思うんです。だからそれを変だねと言っても仕方がないので、とりあえずどうやって気づかせるかということのほうが重要なと思います。

例えば生物室にその辺の魚を捕ってきて飼っていると、これはどこで買ってきたか、何という熱帯魚か、というのを大体生徒は聞いてきます。いや、ここの島の魚だよ、という淡水魚を見ると、こんな魚がいるのかということになってきます。水槽を幾つか置いて、いろんな魚を飼っていると興味ある生徒は見ていて、やっぱり聞いてきます。だからわからないんですよ。こっちの人はハゼは全部イルドゥです。トントンミは名前もらって優秀なんですけど、あとは泳いでいるやつはみんなイユーですね。イユーとイルドゥとトントンミぐらいで片づいています。実は浦内川で300種類ほどと内地の人が言っても、僕らみたいな人が言っても、こっちの人は、何で？三種類じゃないか、という感じがあるんです。これはやっぱり言うよりも、どこかで見ていて、そういう気づく人を育てていけないといけないのかなあという気がします。

また、大会なんかで東京へ連れて行くと、そういう人たちは喜びます。都会に行ける。女の子はどこどこで服を買う。向こうに着いて、「ほら、海の色が違うでしょう」「空の色が違うでしょう」と言っても、そんなもの聞いてません。どここの店ばかり見て、街へ行って、10mも歩いて後ろ振り返ったらいません。みんなどっかへ入って、いっぱいお土産買ってきます。だけど、三日ぐらいしたら「帰りたい」と言うんです。しばらくいると気づくんですね。やっぱり空気が合わない。それからその辺になったらやっといういろいろ見えてくる。空の色が違う。水の色も違う。行く前までは「自分は将来、都会に住みたい」と言った子も、結構「帰りたい」と言う子が多いんです。それは沖縄に帰ってくる人が多いことにつながるのかもしれないんですけど、やっぱり違うところに行かないと気づかないということもあると思うので、こっちでできることは気づくようにしてあげて、外に行った時に一ぺん学術的な話をして、だんだんと育てていけないといけないんじゃないかなと思います。

2年ぐらい前ですか、卒業生でリングをやるために青森の大学に行きたいという生徒がいて、何でこっちにいてリングかと思って聞いたら、リングの赤い色がどうのこうのっているいろいろ話してくるんですけど、僕らはリングは向こうで当たり前の色ですから、何がどう違うのかさっ

ぱりわからないんですね。それはたぶん僕らは逆かもしれないなと思ったことがあります。だからそこにいるとなかなか気づきにくいこともあると思うんで、それはやっぱり変だと言うよりも、すごく地道にやるしかないのかなということを感じました。

嘉 田： 内と外の話なんですけど、私、滋賀県のこと徹底して調べていて、滋賀県民だとみんな思われているんですが、滋賀県民じゃないんです。埼玉県生まれで、修学旅行で琵琶湖、比叡山、京都に行って、こういうところに住みたい！と言って必死になって関西に行ったんです。たぶんよそ者というのは選んで来ているんですよ。皆さんどうですか。沖縄が好きで来ているわけですよ。そうするとそこで既に選別されているわけですよ。だから私は自分の実家は埼玉県の本庄というところなんですけど、何かいろいろ調べろと言われるんですけども、エーッと行って、あそこ嫌で出てきたんだから、本庄のことなんか調べるの嫌よと言って、でも、姉が環境運動やっているから、姉からあなたも調査に来てよ、と言われて、来週、しょうがないか、行こうかと思っているんですが、つまり居住地を選べる人が来ているわけですから、そのことを私はずっと長い間、私は滋賀県生まれじゃないからといって、すごく遠慮していたんです。

滋賀県には三世代住まないと県民じゃないといういわれがありまして、沖縄ではどうでしょう。うちちやうど孫が生まれたから、ようやくこれで滋賀県民になれるなと思っているんですけども、すごく遠慮していたんですけども、吉本さんの地元は、今日言いましたけど、あれは最初から意図的によそ者の目を大事に使おうとしているんですよ。だから後ろめたく思わなくていい。逆によそ者の目と内側の目が出合うとこで新しいものをつくり出そうとしているので、逆にそのあたりを前向きに私、よそ者ってあまり遠慮せんと、ちゃんといい目というか、もともと好きで来たわけですから、それに対して、私の埼玉の実家の86歳になる父がずっと江戸時代からの家に住んでいるんですが、いまだに一度この自分の家を出てみたかったと。86歳になってもまだ言っているんですよ。「私は一度東京に住んでみたかった。あんたは都会に出られてよかったねえ」と父親から言われているんですけど、その辺のところ、否応なく宿命的に長男であったり、あるいは跡取りであったりという、その意識の違いみたいなものを逆にうまく利用して、ある意味オーガナイズしていくというのが大事かなというのを一つ、沖縄の事例ではないんですけども、感じています。

崎 山： 嘉田先生、どうもありがとうございました。先生もそろそろ飛行機の時間ですから…。いや、(司会) まだいいですよ、先生、十分間に合いましたら。

実は私は糸満ですけど、職場は久茂地川沿いにありましたから、久茂地川の川の汚れをずっと見ていて、あるきっかけから久茂地川の運動をすることになりました。それを10年ぐらいしましたが、やって後悔することもいっぱいあります。そんなことしてなければ今ごろ生活は楽だったと思うこともずいぶんありますけど、それはさておきまして、あの運動をしておきながら、でも、自分は糸満のほうではこういう運動はできないよね、というのをずっと思っていました。それはやっぱりその地域の重みというのは、住んでいるとそこにあるわけです。那覇という場ではそういう生活の重みを感じなくて、ただビジョンだけでやればいいんですけど、その矛盾はずいぶん自分の中にありました。だけど、職場も糸満に移りましたから、糸満の川の運動をしておりますけど、それでも地域コミュニティが強いところほど市民運動的な調査というのはなかなか尋常じゃなくして、かなり粘り強いようなやり方をしないとできていかないなというのは今、ちょっと実感しています。その辺はどうですかね、上田さんなんかは。

上 田： 私もうすぐ飛行機に乗らないといけないので、ちょっと調査のことで申し上げたいんで

すが、今までお話しされたのは全部調査する側のお話が主体だったと思うんです。もう一つは、調査される立場というのがあると思うんです。それはしばしば内側の人間なんです、内と外の見方が違うというのは今、ご指摘があった通りなのですが、沖縄の方は結構調査される対象自体になってしまっているんじゃないでしょうか。夏休みに本土から卒論生を連れてきて、先生が調査する。卒論生は実は本当は沖縄に行って、あとは遊びたい。だから結構簡単に調査して帰るというような経験をされている方が、県内に相当いらっしゃるんじゃないかなという気がいたします。

嘉田さんの話も、崎山さんの話も、自分のところになぜ調査しに来るのかと。私はこれは調査というのは、調査される者とする者との間の相互作用に成り立つからだと思うんです。調査されるということは、調査されることによって、された人は変わるんです。調査する者も変わると思うんです。調査する者は当然、無知な状態から調査することによって知識を得ますから、そこで変わるの当たり前なのですが、調査される者も、そうか、こういうこともある。例えば私は音の調査が専門だからやるんですが、多くの方は音を聞いていても意識に上らせない。ところが、私が例えばアンケート用紙を配っても、あるいはインタビューしても、その後、音を聞くようになるんです。そのところが大きいことである。自ら責任がもてる地域のための調査というのは、本来だったらといいますか、学術的には調査されるかもしれないような人が自分で自分のところを調査してしまうというところに、面白いところがあるというふうに思います。だから調査される側の変化といいますか、立場というのも併せて考えたらどうかなと。

私の後輩で、調査することとコミュニティの運動とを切り離していない。大学の先生なんですけど、普通は調査する者はなるべくそういうものから自分の立場を離そうとするんだけど、調査も運動も一環の中でやるということを進めている人がいます。まさにそういうことじゃないかなと思います。

崎山： おそらくその辺が市民調査と大学の調査の違いだと思うんです。たぶんそういう動機があつて、助成を受けて調査をしているという方々はずいぶんいらっしゃると思います。今日、三人の方が五時の便で大阪に帰らなくちゃいけないので、退席されますので、皆さん拍手で。（拍手）どうもありがとうございました。嘉田さんと、上田さんと、平松さんがこれからお帰りになります。

それでは、五分ほど休憩に入りたいと思います。

【休憩】

### 3. 調査の楽しみと信頼性

崎山： 三番目のテーマに移りたいと思います。市民調査の楽しみ信頼性というところをちょっとお話ししたいと思います。

そのテーマでいきますとやはりここで語っていただきたいのは、泡瀬の埋め立て事業に関して当然、環境調査をするわけですから、いわゆる事業者のほうから環境調査が提示されました。その結果として貴重な種類はあの海域にはいない。したがって、埋め立てはよしという結論でありましたが、それに対してどういうこだわりがあったかわかりませんが、泡瀬の市民グループが立ち上がりまして市民調査を始めたわけです。それが昨日の藤井さんのレポートになりますけど、その藤井さんたちの市民調査のレポートが事業者のレポートになかったことをどん



ん事実として明らかにしていった。なかったはずの希少種が幾つも現れたということがありますね。それは一体何なのか。コンサルタントが調査したデータを上回ったものが市民調査から出たという話になりますけど、結局、その希少種があるということは事業者も認めてきたわけですよ。一般的には市民調査というのは科学性が低いと言われながら、この見事な結果というのは何だったんだろう。藤井さん、その辺のことについて。

藤井： 山下さんに後で聞いたんですけれども、午前中の話で、何でクビレミドロの調査とかやろうと思ったのか。発表の中でもちょっと話をさせてもらったんですけれども、やっぱり自分たちで何か知っておくほうがいいだろうなど。環境保全のための委員会が開かれて、それに今は市民団体の方も参加もしてはいるんですけれども、何か変だなと思うのは、いつもデータを用意するのが事業者側で、それを基に話をする。専門家と言われている委員の人たちでさえもそれを事前にもらって、それで判断していくんだけれども、本来だったら自分たちが、地元の人たちが一番詳しいとか、その専門家の人たちが詳しいから、その人たちのデータを持ち寄って話をするとかいうのが、どちらかというとも本来の姿なのかなという気も何となくしています。だから地元の人たちの意見を聞く時に、地元の人たちがちゃんとその干潟のことを知っている。ただ、それは市民なので、どのレベルで知っているのかという問題はあるけれども、ちゃんと見ているとか、変だなと思うところをちゃんとチェックできるとか、それは科学的レベルかどうかは別として、実感としておかしいとかということが言えるかどうかということが問われていると思ったのです。だからみんなでクビレミドロを調査に行って、あそこで見て、ここはこんなところなんだよと。何かいっぱいいろんなこと書いてあるけれども、自分が見てきたのとどうもニュアンスとして違うとか、これはおかしいとかと言えるためにはちゃんと見ておく必要があるだろうなど。その題材としてクビレミドロというのを沖縄島にしかないとか言うのと、見た目はちょっとチャチだけれども、なんかかなりすごそうなので、これを調べるといふことにして、でも、そのことをみんなで見ておこうと。そして「ここは何もないとこだよ」と言って、「エッ、そんなことなかったよ。行ってみたらこんなだったのに」ということがちゃんと実感としてわかるようになればいいなあというのが僕の気持ちなんです。

崎山： 泡瀬の市民調査が明らかにしたことはクビレミドロだけじゃなくて、いろんな希少種が出て(司会) きましたよね。

山下： 泡瀬のアセス書、環境影響評価書なんですけれども、例えば貝類だと17、8種類ぐらいしか名がリストアップされていません。魚類でも具体的な名前が出ている種類というのはおそらく20種なかったと思うんです。非常にずさんなアセス書であるわけですが、それは一応、縦覧期間というのがあって、公開されているわけです。その間に文句がありませんでしたということで、いまだに「このアセス書、ひどいじゃないか」と言っても、彼らは「いえいえ、誰も文句言わなかったし、県の環境担当もこれでよしとした。沖縄県もこれで認めた。だから我々には落ち度はありません」という言い方をするわけです。

ところが、それは環境影響評価という本来の目的にはまず沿っていないわけです。実際に泡瀬にどんな生きものがあるかということをもっと反省していないようなものをもって工事できるかという、決してそういうことがあってはいけないわけです。実際に調べてみると今、300種類以上の貝類の生息が確認されているわけですが、そういう状況があって、要するにその自然に何が暮らしているのかということ調べてというのは生物学でもあるんですけれども、非常に基本的な地域学だと思うんです。

私は潟の生態史研究会の山下と申しますけれども、もう一つ、泡瀬干潟生物多様性研究会の代表もしてまして、それで泡瀬にいる生物を貝だけではなくて、全部満遍なくすべての分類群で調べようということで、海草の専門家であるとか、甲殻類の専門家であるとかという人を入れて、全体的な目録をつくらうという調査をしているのです。その中で市民という言い方は、自分が専門家とか、よくわかりませんが、その中で要するに市民と協力してやるというのはすごくたくさんのメリットがあります。

崎 山： 泡瀬のケースを見た場合には、いわゆる事業者の調査を上回る力が市民調査の中にあるんだ(司会) ということをやがわせるところがあるわけです。それはどうしてそうなんだろう。僕は決して事業者の調査を受けたコンサルがサボったとはそれほどは思っていないんです。事業者の意向に合わせたのはひょっとしたらあるかもしれないんだけど、調査の手法としてのサボりはそれほどなかったのかもしれない。僕は逆にそれより以上に、市民調査のほうにもっと優れたものがあるというふうな見方をしているんです。要するに、情報の収集の選択肢が市民調査の中にずいぶんあるのではないかなという気がしますけど、その辺はどうですかね。例えば自分たちがコンサルとして請け負った場合に、市民調査のレベルを本当にできるのかと言われた場合、かなり疑問はあるでしょう。数千万以上かかると思うんです。

山 下： そうですね。特に定量的な調査とかというのはものすごくお金がかかりますし、あと市民というか、そこで暮らしている地元の人の長年の知識を使うということは調査にとっても非常に早道でして、特に泡瀬なんかでも土地勘のある人に案内してもらおうということから僕、入りましたが、五回ぐらい干潟を歩くまで、どうしても地形が把握できなかったです。それから今、僕、西表の浦内川の調査もしていますけれども、そこも非常に複雑な道で、なおさら道がない。それから過去に湿地があって、そこから川が海に出ていたんですけども、今、その川がなくなって、そのラグーンだけが残っているんです。でも、そういうちょっと普通に行っただけではわからないような特殊な生態系がある場所を土地の人は知っていたりします。それから長年の観察で、ここは増水したらこういう形になるとか、そういう変化も全部知っていますので、やはりそういう住民の長年の知識の蓄積を調査に組み込んで、一緒にやるというのは非常に貴重だと思います。

藤 井： 泡瀬に関しては、アセス自体が古いアセス法ができる前のだったということがまず一つはあると思うんです。それでそんなにたくさんのリストアップをする必要がなかった。なくてもたぶん認可が下りるので、業者としては最低限のラインをクリアすればいいわけですから、当然、ちょっと調べたらというか、その時にわかっていた事実だけでも、それをくみ上げることがあったら、それを上回るデータがあったけれども、それをしなかった。鳥に関しては野鳥の会とかが調べていたものも全然反映されていないし、それから干潟の生きものについても、その当時ちょっと調べたら実際はもうわかっていたことも反映されてなくて、ただこれぐらいやっておけばいいだろうなというラインだった。本当だったらアセス法の趣旨にのっとったら、きっともどんなふうな調査したらいいのかとか、市民はどんなデータを持っているのかとか、そんなことも含めて一緒に…。で、共有の価値判断を持ったうえでやるのか、やらないのか。もう良い悪いじゃないんですよね。事業者がいて、それから市民がいてというか、やっている公共事業というのは市民のものでありますから、やるかどうか、それにどんなデータがいるのかというのは、僕らが本当はちゃんと持っておかないといけない。

だから市民調査というのは確かに今回、泡瀬に関しては、今日の趣旨から言うとちょっと違

うのかもしれない。でも、日頃からそうやって地元のことを知っておかないといけないという部分と、それからそういう事業を行う時に、本当は不幸なことなんだけれども、それを自分たちが知っていかないといけない、後追いでも知っていかないといけないということはちょっと違うとは思いますが、ちょっと結論が自分で言っていてわからなくなっちゃったんですが、たぶん泡瀬の場合と普通の市民調査の部分は少し違いがあるだろうなど。

崎 山： 環境影響評価書等を見てまいりますと、とにかくいろんなデータが出てまいりますけど、私(司会) ごみ問題のデータを見たことがありますけど、そのデータは一体何の意味を持っているかというのがよくわからない。それがみんな1ページごとに終わっていて、脈絡がないというデータなんです。それに対して泡瀬のほうのデータというのは、おそらくそれはすごく生活の中の脈絡を反映した調査の結果としてあって、それは特性を持っているんじゃないか。それがいろんなわからないことを表現してきたのではないのかなということも思っています。そういうことを考えますと、いわゆる一見素人に見える市民調査なんですけど、そこにはものすごく歴史を反映した重みがあるということを私は思います。今は事例として泡瀬の話をしましたけれど、それはもっと社会面にもそういう話がいっぱいあって、あるいは戦災記録の中にもそういう話がたぶんいっぱいあると思うんです。その辺をもっと自信を持って、僕たちは市民調査を進めるということをするべきではないのかなというふうに感じました。

そこでそういう市民側の努力というのは県外ではどういうふうに反映しているのかというのは、佐藤先生、そういう事例はわかりませんか。

佐 藤： 平取町で、二つ目のダムがあり、一つ目が二風谷(にぶたに)ダムです。皆さんもご存じだと思いますが、裁判を起こされて、今後ダムを建設する時にはアイヌ文化への影響を調べるべきだということで、それを受けて、2006年から二つ目のダムの建設に向けて調査が行われていて、国土交通省の方からの調査予算を平取町が委託されてやっています。ほぼ100%新規の人たちの手による調査が行われております。私がかかわっているのは、調査を行う人たちの結果を聞き取って、何らかの方向性をつくるという委員の中の地元の人でもなくて有識者の一人として関わっているのですけれども、今年で2年目で今、中間報告書をまとめておるところです。

今まさに話されている、要するに素人集団であるということ。確かに私とか有識者としてサポートしているのですが、基本的には素人がやっている。その信頼性というものが、だんだんと明らかになってきて、少なくとも中間報告書を見ている限りでは、特にアイヌ文化に関わる聞き取り部分で、外から想像もつかないような非常に貴重なデータが集まっている状況です。

でも、この調査はダムの建設の是非を問うものではなく、ダムはできるという前提で行われているという大きな縛りがあるんですね。今後それがどうなっていくかはわかりませんが、来年度、最終年度で、今後も注目していきたいと思っています。アイヌ二風谷アイヌ民俗博物館のホームページに調査の報告がありますので見て頂きたいと思います。

崎 山： 今、二風谷ダムの話がありまして、沖縄でもちょっと似たような事例がありまして、これ(司会) は羽地大川ダムがもうできましたけど、そのダムができる前提の中で、羽地大川の流域の生活史というのは、名桜大学の中村先生なんかを中心にしてまとめたのがありますね。中村先生はその地域史を県内でもいろんなことを普及された方ですけど、そういう取り組みの中でも似たようなことがありました。

今の話で、北海道大学の宮内先生、何かございませんか。

宮内：札幌から参りました宮内です。市民調査については特に行政の方とかが「信頼できるのか」と言うのですが、そこは開き直ったほうが良いのではないかと思います。いわゆる学識者やコンサルがやったものは信頼性があると思こんでいるだけで、そのデータ的前提だとか、手法だとか、そこまで遡って信頼性があるのかないか言っているわけではないのです。研究者だとかコンサルだとかが（一応私も研究者ですが）、手法だとか枠組みだとか、そこまで問われちゃうとですね、どれがどう信頼性があるなんて非常に難しくて言えないわけですね。ですから、そこはあまり言わないようにしておくとかですね、閉じられた学会の中ではあまり問わないことにしておくとか、あるいは中で話しても外に向かってはあまり言わないでおくとかしているのが多いと思うのですが。

だから、研究者が、「信頼性というのは結構疑わしいんだよ」と積極的に発言していくとかですね、あるいは市民調査をやっている人たちが、あまり信頼性みたいなことで妙に、自分たちのことを言わなくていいのではないか。そこはかなり自信を持って、多くの人が調べた結果こういうことがわかったと。それは別に行政に向かってということではなく、社会に向かって言っていた方が生産的な議論になるかなという気がしています。

崎山：ありがとうございました。今の話題に関して、まだどなたかありましたら。  
(司会)

山下：今の話なのですが、泡瀬の問題で参考になるとすれば、いわゆる素人集団と言われる人たちがやったのがどういう意味を持っているのかとか、どうだったのかということになると思います。泡瀬に関しては藤井さんが中心になっているクビレミドロの調査と、もう一つ、泡瀬干潟の連絡会の人たちが海草を移植した、その移植の調査をやっています。こちらの移植の調査についても、僕はそういう海のコンサルタントの人から話を聞いたんですが、コンサルタント業界でも話題になっているらしい。で、気になっているらしい。「あの調査はどうだった」とか、「信用できるのかね」と言ったら、担当しているコンサルタントが「うん、あれは信用できる」と答えた。そういう話がまことしやかに伝わってきている。本当かどうか知らないですよ。

それで何を読み取るかということ、調査をやるということが専門家と言われている人たちのもの、特権ではないということが一つあると思うんです。やり方次第では互角あるいはそれ以上のものができるんだということの一つ示していると思うんです。もう一つは、今まで沖縄は非常に郷土意識、地元意識が強いですけれども、それが具体的な場所というものにどれだけ結び付いているかということ、これがどうなのかなというちょっとクエスチョンマークが付くんです。これは先ほどから海との関わりがなくなっているというような指摘がありましたけれども、そういうこととつながってくると思うんです。どれだけその場所を知っているかということは、どれだけそこに関わりを持てるか、どれだけ関わっているかということになると思うので、それはやっぱり地元のあるものを気づいていくというプロセスになってくると思うんです。その二つの意味で非常に重要になってきていると思います。

ですから、埋め立てが推進か反対かは別問題としまして、推進、埋め立てようと言っている人たちの話のトーンも変わってきているんです。今までは「汚い海だったから」だとかいうことが枕言葉的に付いていたのが、泡瀬の干潟を守るためには埋め立てが必要なんだ、干潟を守るために早くするんだと。文脈は違いますけれども、やっぱりその重要性というか、その具体的なものがそれで浸透してきているのは事実だと思うんです。ですからそういう意味ではとても重要で、これはなにも専門的なものではなくて、その場所に本来関わっていくべき人が関われる絶好のツールなんじゃないのかなというふうに思います。

崎 山： 市民調査能力が高まったという事実が今、我々日本の社会にあると思うんです。それは当然、(司会) 日本は教育を高めてきたわけですから、そういう人たちが社会に出ていく。いわゆる大学とか、行政以外にもずいぶん広まっていったという結果ですよ。それは当然認めるべきであって、教育のおかげであって、そういうふうな社会に僕たちはもう立っているということを行政も知らないといけないと思うんです。ただ、今、市民のほうの調査といわゆる行政とか、研究機関もそうですかね。摩擦みたいのが若干ありますけど、これはおそらく僕は本来のデータの取り方のうぬぬの問題よりも、制度の枠で縛られている発言と自由な発言の違いだと思うんです。実態は僕、そうだと思うんですよ。あとは難癖をつけているだけであって。ですから、そういう社会が到来したということを僕たちは認めるべきではないのかなと思うんです。その辺がなかなか日本の社会ではまだ何となく私たちのお上は認めていないように思いますけど、どうなんですか、その辺は。沖国大の政治学の佐藤先生、お願いします。

佐 藤： ありがとうございます。私は市民調査に関わっている者ではございませんで、今日は勉強をさせていただきにまいりました。地域研究所の家中先生に勉強しに来なさいと言われて来たわけですが、本当にとっても良い勉強をさせていただいて、勇気づけられる部分がいっぱいありました。何かと言いますと、ちょっと宣伝になるかもしれませんが、ローカルマニフェストという言葉がございまして、これは何かと言いますと、地方自治体の選挙にあたって、これまでのような裏付けのない空約束を出すのではなくて、本当に検証可能な具体的な裏づけのある政策を出して、それによって争うような選挙にしようという動きがあるんです。それにあたって全国的にこれを推進しようということがあったんですが、ローカルマニフェスト推進ネットワークというのが全国で立ち上がりまして、沖縄でも2月18日にあるんですけども、これで自分たちが考えていることは市民がマニフェストをつくってしまおうと。マニフェストというのは一昨年の衆議院選挙ではやった言葉なんですけど、あれを政党が作るのではなくて、市民、住民、どちらでもかまいませんが、住んでいる者が自分たちの住んでいる町の、あるいは村の、市の課題は何なのだろう、何が問題なのか、欠けていることは何なのか、そういうことを自分たちで見て調べて、それをまとめていこう。それを提示して、自分たちはこういう考えがあるんだ、こういう具体的なことが必要だと考えるということ、例えば政党であったり、候補者だつたりに問う。そういう形のマニフェストをつくろう。そのためには何が必要かということ、を議論している中で、今日の市民調査の可能性というフォーラムのお知らせをいただいて、非常に勉強になったわけです。

自分らの関心領域の中で、さまざまな地域の調査、市民調査、住民調査が沖縄でもこれほど多様に豊かに行われているということがどうも認識されていない部分が自分の中であった。それでたぶんこれは行政、あるいは地方自治の側で一から始めるとかという話ではなくて、既にさまざまな地域にいらっしゃる方たちがそれぞれの中でどのような問題を見ておられるかということ、そういう知恵を出し合う場をつくっていくことがローカルマニフェストをつくっていくうえで重要な基盤なるのではないかと。沖縄県の中でも既にそういう活動がたくさんあるなら、ちなみにこれは政治的な話にはなるのですけれども、特定の政党であるとか、どこかを支持するという話では全然ありませんで、自治のやり方自体を変えていこうという議論です。そのうえで今日の話は本当に目を開かせていただくようなことでした。

ただ、午前中のお話を伺っていて思ったのは、成功する、持続するような市民調査というものは、そもそも必要性に迫られて、あるいは必要性があって、それを認識して、それで住民が始めているということがあるのかなと思ったわけです。そのローカルマニフェスト、あるいは市民マニフェストをつくろう、市民調査をしようというのはそこがどうも逆立ちしてしまうの

ではないか。要するにこういうことがあるので市民調査を始めませんか、始めましょう、という形の呼びかけになってしまう恐れがあって、そうするとこれはとても定着するには弱いだろうという気がいたしました。もう一つ、仮にローカルマニフェストという形の地方自治体での選挙が盛んになっていくと、またここに専門的な知識、専門的な技術を持ったコンサルタントの方々が、「じゃあ、自分たちがマニフェストを準備しましょう」という形で地域の要求なり何なりをつくってしまう。そういう請け負い業でマニフェストが出てきてしまう可能性もあるのかなあというような気がいたしまして、そのところは、これは地方自治を勉強している者がいつも言うことで、お題目みたいに言っていることなのですが、市民が、住民が、自分たちが必要であることを自分たちの力でやっていることをやらないと駄目なんだということの確認がないといけないのかなと。それは十分できるんだということを今日は実践を踏まえて、特にこの総合討論の中で非常に実績があるという部分でお話しいただいて、本当にありがとうございました。

宮 城： 昨日の報告でも、市民調査でもかなり高いレベルの調査ができるんだという一つの事例とし（司会）て感じたのですけれども、阿波根昌鴻資料調査会の調査のレベルの高さというんですか、それが市民調査でもできるんだと。そういうことをちょっと公文書館の久部良さんお話ししていただけますか。

久部良：（阿波根昌鴻資料調査会）公文書館というよりは私個人での参加ですので、市民の調査といえるのかどうかはわかりませんが、特に伊江島の阿波根昌鴻さんの資料のすごさに魅せられて友人や全国の専門家と有志達、あるいはその資料をなんとかかしたいという有志だけで調査会が始まり、継続しているところであります。昨日から今日あたりですね、聞かせて頂いて、自分に自問自答しているところなので、何を話して良いのかわからないのですが、私が阿波根昌鴻資料調査を通して自分も戦後沖縄史、あの公文書館の資料集めの者として、これはなんとか沖縄のために残しておかなければならない資料であるし、その資料を調査し、そこから学ぶことによって私自身成長したいという、あくまで自己本位で調査に関わっているので、それが果たして沖縄にあるいは伊江島の人たちに、どのように関係していけるのかというと正直言って自信ありません。今私たちの調査に加わったメンバーはのべ100人以上になりますが、残念ながら、伊江島出身の方は一人も入っていないんですね。色々複雑な問題もありまして、関わらない。沖縄の基地問題がはらんでいるだけに伊江島の人達に関わってもらえないというふうなことがあります。地域に還元したいと思いつつも複雑な思いです。でもこれだけは言えるんですが、この資料調査に関わったメンバー一人一人がですね、沖縄のおじいが残した資料を通して、自分なりに足下を見つめて、自らの職場や地域に持ち帰って、何らかの変化を調査する側の変化なんですけれども、残していくということが言えるのではないかと思います。

宇 根：（阿波根昌鴻資料調査会）今、久部良さんが話したように、まだ地域に還元できていないというのが悩みですね。ただ、今考えていますのは、伊江島の学校の先生に関わってもらえたらなっている風に思っています。これから具体的に地域に入って行けたらと思っているんですね。それからわびあいの里では毎年3月に里主催の学習会をやっています、今年はそれにパネル展示という形で参加したいなと思っています。

鳥 山： 阿波根昌鴻資料調査会のメンバーの鳥山です。技術的なことだけ1点だけ付け加えたいんですけれども、今、いろんな分野で、調査の信頼性とかいうことが出てますけれども、そこに関

してだけ少し話します。昨日の報告の中で、調査のスケッチというのを皆さんに資料として見てもらったと思うんですけども、要するに、あの倉庫の中の乱雑な状態をそのままスケッチする、ということにしてたわけです。あれをとっておくことで、僕たちの調査の信頼性が保証されるので、より大切なものだと思っています。

というのは、歴史資料の調査をするときにも、やっぱり前提として、そこはもう否定なく調査を行う人間の価値判断が働いているということは避けられないんですよ。その価値判断が長い目で見ると正しいかどうかということはまったく保証できない。ただそうは言っても、調査しないでそのまま放っておけば良いかって言うて決してそうじゃないわけで。我々がそこに踏み込んだときに、その資料の状態はどういうものであったか、その資料文のあり方自体が歴史を語っているんだということがあります。調査をする以上はどうしてもそれを壊してしまうわけですが、ただまあ、壊す以前にどうであったかということをとにかくちゃんと記録しておいて、後々ですね、また違う価値観からそれを見直したときにどうかということが検証できるようなものを残しておこうということを心がけています。

崎 山： 先ほどの宇根さんの発言の中に、伊江島の地域の人たちは関わっていないという話がありま(司会) したけど、特に沖縄では基地関係の話になるとそういう場面がずいぶんあると思いますね。開発という場面でもそうなると思います。地域は黙ってしまう。それはそういう問題だけに限りませんが、実は沖縄の島は人情が厚いとか何とか、いっぱい良い表現もありますけど、どこにも光と影というのがありまして、島社会の光と影というのはあると思うんです。それは私もまだよくわかりませんが、いわゆるこれから新しい仕組みをつくっていく場合に光の部分だけ見てもつukれない。仕組みをつくっていく場合にどうしてもその影の部分を解析していつて、新しい仕組みの提案をしないと僕はできないと思うんです。沖縄は非常にわかっているようで実はわからない部分が残されていると私は思います。それはたぶん学術研究の中でもわからないだろうと。それは暮らしている人がそこに関わってきて、たぶん市民調査の中で明らかにしていくんだろうなという感じはしております。感じしか今、私もわかりません。

#### 4. 調査を地域にどう還元するか

崎 山： そろそろ時間がなくなってまいりましたけど、最後に、この市民調査をどういうふうにして(司会) 地域に還元していこうかというテーマに入りたいと思います。今、5時58分ぐらいですから、ちょっと10分ぐらい延長させていただけますか。最後のまとめをその辺でやりたいと思います。

今回、いろんな方々が調査報告をしていただきましたけど、これから自分たちのこのレポートはどういうふうに地域に還元できる可能性があるだろうか、というところを話していただければと思います。これまで自然系の人たちにずいぶん話をしてもらいましたから、逆に今度は例えば紙のほうの栗国さん、赤土のほうの干川さんあたりに、例えば干川さんのほうはどうして農家のほうに伝えられるのかということですね。これは結論が出ているわけではないと思いますが、一つ考え方を教えていただきたいと思うのです。いかがでしょうか。

栗 国： 活動を初めて2年目ですけども、展示会と体験学習というものと講演という形で研究を進めながら情報発信を行っています。発表の時に紹介した冊子がありますが、それは私たちが調査をして編集も全部して作成し、11月の下旬に出来て、12月に助成を受けて、南風原文化センターで12月4日から十日間展示をしました。それに向けた資料なんですけど、実は、この取材を

する時に県立博物館が資料を使ったので、そこに一部納品をしたら、「粟国さんこれね、県立博物館レベルだよ」と言われたんです。県博レベルとは何かという問題と、私たちはどのレベルでこの活動をしているのかという問題があったんですが、「まあ、ありがとうございます」と言って、機会がありましたら協力しますよ、ということで帰ってきたんですね。

崎 山： 粟国さん、県博レベルというのは良い評価しているのか、悪い評価しているのか、何だろ(司会) う。それがよくわからない。(会場笑い)

粟 国： 両方の意味で受け取ったんですが、おもしろいと思って。戻ってきて、さっそく12月の下旬に県立博物館の方で、企画展でパネルのデータを使いたいと言ってきたんです。私たちの市民活動というのは、学術研究者だけの活動の場ではなかったんですが、そういう形で私たちの成果を…。先ほど嘉田先生が吉本哲朗さんの語録を最後に紹介されたんですが、「調べた人しか詳しくならない」という、まさにそうだなと思って、そういう気持ちで県博の展示には協力しました。そのことによって私たちの評価が高まったかというところとわからないのですが、それはあまり問題ではなくて、淡々と我々ができることをやっていけばいいんだなあと思いました。

市民調査と言っても、例えば阿波根昌鴻資料調査会のように大学で研究している人もいっぱい入っている例もあって、不思議な感じがして、市民調査とは何かという疑問もあるのですが。個人個人多様な面をもっているのだから良いのかとか。また、調べたものがここで利用されるのかはわからない。けれども、まあ続けるしかないかなあ、とそういう風に感じました。

崎 山： 干川さんいかがですか。  
(司会)

干 川： 私たちがやっているのは、どうしても農業政策というところに行かないと実践できないんです。でも根底としては、例えば、十数年前からの棚田を守るというとか、それなりに農水省がやっているんです。農水省というか上の方では、例えば具体的には赤土流失の問題とかCO2の削減のためにバイオエネルギーを使うとかやっていて、県とか市のレベルでそういう政策を、もっと積極的に農水省に提起していけば受け入れられる部分もあるかと思うんですが、なかなかその辺りが弱いと思うんです。

崎 山： 干川さんがお住まいの同じ地域の農民の方々はどうでしょうか。  
(司会)

干 川： 一番地域のことをよく知っているのはやはり地域の方で、その辺を考えた上で具体的な政策を積み上げて行かなくてはと思います。ただ農家の意見というのは、まだ個々の意見はすごくよくわかるんですが、総合的なものをどういう趣旨で説明していくかという、政策的な点ではまだ難しいのではないかと思います。

崎 山： ちょっと戻りますけど、なかなか語りがたいところの市民あるいは住民の生の声をどうして(司会) 出すかということも、市民調査の中ではある場面出てくるとは思いますけど、その辺は循環研の土屋さんどうですかね。非常にシビアなごみ問題というのを追っかけていますけど、どういうふうにしたら市民あるいは住民の生の声を聞けるのか。



土 屋： 急にそんな難しい質問をこんなに年端もいかない僕に聞くのはちょっとあれなんで。たぶん僕が関わっているところでは、おそらく住民の人は僕に対しては本音を喋っていないというふうに僕は考えています。とにかく通い続けることで少しでも本音に近い部分を、本音と信じた部分でもあるわけですが、そういうものを捨てていっていること。そしてそれがその紛争問題だけではなくて、その周りにその人が生活していけるいろんな地域が成り立っていけるような問題を抱えているわけで、そういった直接争点とは関わりのないように見える問題をコツコツと調べながら、少しでもその人たちの本音に近づきたいと。個人の本音というよりも、その問題に関わっている人たちの本音に近づきたいというふうに考えています。

せっかく振っていただいたので、さっきからずっと考えている質問があるんです。今さらタイトルについて聞くのもなんなんですけど、この「自らが責任をもつ」というのは、地域をつくるということにかかっているのか、それとも「責任をもてる」というのは、調査に責任を持つということはどういうことなのかを考えるのか、その辺を少しお聞きできればありがたいんですが。

崎 山： 誰に聞きたいですか。(会場笑い)

(司会)

土 屋： 司会の方に。

宮 城： 一応、タイトルの原案を出したのは私なので答えるんですけど、どっちでも取れるよにわざと(司会)とそういうふうにしたので、そういう意図が実はあります。

崎 山： もうしばらくしたら閉めますけど、先ほど嘉田先生が、こういう市民調査を継続するという(司会)ことは事務局機能をつくるのが大事だ、というふうにおっしゃられましたけど、事務局をつくるというのは意外と大変なんですよね。最初のうちはすごく楽しくて、3年ぐらいみんな突っ走れるんです。そのうち4年ぐらいからどういう理由でやめようかということを考え始めまして、うちはやめられなくて10年付き合いましたけど、それで人生かなり誤ったなと思います。

事務局機能をどうつくるか。これはたぶん今、沖縄の社会というのはきっと二つの社会の場面を持っていると思うんです。例えば従来の集落のように公民館機能が強力なところと、もう公民館機能がなくて、例えば那覇市なんか公民館機能がありませんから、それは自治公民館のことですよ。例えば与那覇の字詰みたいところは公民館機能が充実していればそういうことがちゃんとできる。だけど、それをすべてに求めても、実は変わっているわけですから、そんな機能はこの地域にもあるというわけにいかないですよ。

そこでは市民という横つながりの組織をつくらないといけないわけですけど、その時の事務局機能をどうするかという課題がかなり出てくると思いますね。その辺はどうすればいいんでしょうかね。何かいい知恵がありますか。その辺是那覇市の場合はNPO支援センターみたいのができましたけど、それはどうなんだろうかな…。良い例がどっかありますか。あるいはちゃんと行政がそういうことも含めて支援をしているんだとか、それも一つの自治機能として支援しているんだとか、何かそういうのはあるんでしょうか。地域交流センターの山本さんなんか何かないですか。山本さんか三輪さん、お願いします。

三 輪： 私のいるところは財団法人千里リサイクルプラザというのが大阪の北にありまして、10億円の基金を持って、その基金で市民研究というのを支援しています。それで今、ちょっと体質を

変えていこうということで、プロジェクトを提案して、そのプロジェクトで吹田市内のさまざまな循環型社会としてやれるための実験をする3年ないし5年の活動に対して助成しようと。そういうことを今やっています。

実際に難しいのは、そこにおられる事務局の方というのは行政から来られていまして、市民感覚というのがなかなかわからない。市民はまた行政は平気でごう…というふうな見方があって、折り合いがなかなかつかないのですが、やはり十何年付き合ってきますとだんだんと市民の感覚、行政の感覚がわかるようになってきて、ようやくスムーズにこれから流れていくかなと。山本さんが失敗ゼロとおっしゃいましたが、私はぜひとも成功に向かっていきたいと思っています。そういう何か母体になるような組織があればいいんですけど、ただこういうのって10億円とか、100億円とか、そんなお金の話は実際できるわけがないので、もっと緩やかなネットワークというのでしょうか、今回、こういうフォーラムを設けていただいたのも一つの緩やかなネットワークにして、こういう地域研究所があって、積極的にそういう市民研究を助けていこうとされていますので、できたら今、沖縄本島内にある資源としたら地域研究所がこういう機能の一部をこれから積極的に担っていただくといいんじゃないかと私は思うんです。

山本： 私もそういう気がするんですが、話が少し戻りますけど、崎山さんからの投げかけで、行政というのは市民調査をあんまり信用していないんじゃないかという話がありましたが、逆に専門家の調査というのは一体どういうものかというのがよくわからないんです。例えば今の泡瀬の干潟の調査なんて藤井さんがやっているわけだから、彼は立場が違えばアセスメントやっているかもわからないような人が、プロとして通用する人たちがやっているわけです。だから市民調査って何なの？という話がありましたが、市民が関わるという意味であれば、専門家だけがやるのか、あるいは限られた資源と人材の中でやる調査よりもはるかに説得力も本来あるはずだと。

ただ、これは先ほどの佐藤さんの話とつながりますけど、結局、その市民がやったことを信用するか、しないかというのは行政の体質とか、行政と市民の関係論の問題だと思うんです。そういうことで言うと、沖縄というのはどうも行政が権威に弱くて、市民には強いと、こういうような体質があって、そこで何か特に問題があるような気がするんです。だけど、全国を見ても逆な話もいっぱいあって、市民調査が例えば国の機関なんかでも、私はかつて横浜に住んでいまして、鶴見川という日本でワースト5に入るような川の下流でいろいろ活動していましたが、5～6年前にヨコハマゴミムシというわけのわからない小さな虫がいるという話になって、これは市民がそういうことを言い出したわけです。これで国土交通省は実際に動いたんです。調査しようと。そんな小さい虫をどうやって調べるのかと言って、市民にお願いして、とにかく片っ端からずっとその流域を調査してもらおうということで、そういうことをやった。動いたということは、私は非常に画期的なことだと思うんですけど、そういうふうに市民調査に基づいて何かやろうというような行政マンも存在するし、地域によっては行政と市民との関係がずいぶんうまくいっているようなところも出てきている。

そういうことで言うと、沖縄は少し行政が専門家の虎の威を借りて何とかというのがまだまだあるような気がするので、そういうことで言うと市民調査の権威の後ろ楯、そのためにはやっぱり大学というのは非常に役に立つ。沖縄大学が後ろ楯になるというのは、私は市民調査のステータスを上げるというか、対行政との関係においてそういう意義づけをしていくうえにおいても非常に有益ではないかというふうに思いますので、まさに地域研究所でそういう事務局をやっていただいて、後ろ楯になっていただくといいというのが誠によろしいのではないかと。いかがなものでしょうか。

崎 山： それでは一通り私のほうで勝手にテーマを立てて進行してまいりましたが、そういうテーマ以外に、自分はこういう発言をしたいという人を二人ほど…。かなり拳手をされていますから、どうしましょう。お金を高く払ってくれる人から（笑）。すみません、ちょっと手を挙げてください…。

では、四人でいいですね。じゃあ、ひとつ手短によろしくお願いします。お名前と所属を。

伊勢藤： 京都大学総合博物館の伊勢藤と申します。事務局をどうするかという話ですが、出来ればお金儲けが出来る団体にしていく方が良いと思います。市民がとったからデータが信用できないということはなく、解釈の問題だと思えます。だから全然心配することはない。問題は行政の人たちが内容を評価できないということ。私は博士号とったんですが、まわりに社会問題に関心ある人がいない。研究者側の意識が低いところに問題があるように思われます。

崎 山： じゃあ、水野さん。

(司会)

水 野： 私は環境省の専門家の水野と申します。三十数年間環境省にいて全国を転々としていたのですが、北海道の稚内にいる時に、郷土研究で高校で非常に立派にやっている高校がありました。沖縄は文化面に力を入れても良い時期に来ていると思えます。今日も高校生が来てくれると良い伝達役になったのではないかと思います。そのためには先生が興味を持つことだと思います。

二つ提案があります。泡瀬の干潟ですが、工事を進める人たちは仕事ですからやるのは当たり前ですが、工事に対して環境面でいうべき立場の環境省とか沖縄県はもう少し役割を果たすべきではないかと。なんか内部告発みたいですが（笑）。もうすぐ定年ですので…。

ジュゴンシンポジウムにはたくさんの人が集まっていました。泡瀬の干潟でも観察会を開きました。見せることが大切です。高校生の感想を読み上げます。

崎 山： 一つだけお願いしましょう。

(司会)

水 野： はい、わかりました。何でこれ以上自然を壊していくのかとか、この後のことをどうなると考えているのか、大きくやった方が良く思うんです。そんなことで私の携帯電話を教えてください。 (笑) (電話番号を言う)。興味のある方はあとで私の所に来てください。

男 性： 私は生物の専門家ですが、市民調査といえども生物の場合は、専門家がいないとどうしようもないという面があります。ただし専門家といえどもわからないことはたくさんあります。専門家もどンドン外に出て行こうと思えますので、みなさんも市民調査の中に専門家を入れてほしいと思います。これからも努力していきたいと思えます。

崎 山： どうもありがとうございます。専門家とか、素人という表現の仕方はすごく誤解を生むところもあったと思えますけど、いわゆる専門家に対する何も知らない素人というふうな言い方は、たぶんみんな言っていないと思うんです。それは市民という立場だと思うんです。企業にいても企業市民という言い方を今、NPOでしますけど、そういう社会のしがらみに縛られない自由な市民としての立場から関わっていく。それは例えば、自分はコンサルである人かもしれないけど、市民としての立場で関わっていく。あるいは行政にいるけど、水野さんみたいに市

民としての立場から関わっていくという、そういう立場での市民調査だったと思うんです。その辺はまだまだ議論を深めるところがあるかもしれませんが、今日はそれぐらいにしておきましょう。

時間がオーバーしてしまいましたけど、私のほうの司会はこれで終わらせていただきまして、ちょっと全体の……。

## 5. まとめ

宮 城： それでは、総合討論をこれで終わらせていただきまして、この全体の二日間のフォーラムの(司会) 閉会式みたいなことをやりたいと思うんです。

最後に、このフォーラムの言い出しっぺであります家中さんに1分か3分ぐらいでまとめを。

家 中： 皆さん本当にどうもありがとうございました。昨日の経過説明をきちんと言おうと思いがらうまく言えなかったのだけど、とにかく2年間かけてトヨタの喜田亮子さんといろいろ打ち合わせをしながら、喜田さんがまた実際の助成対象者の方たちを回って、そこの本当の思いとかを聞き取って、それをまた僕らとかのこちら側での要求と、うまく今の言葉で言うところとコラボレーションできたということだと思います。

一つには、さっきの責任の問題が出てきましたけれど、僕らなんか歩いたり、あるいは自分でもそうなんです、やっぱりイメージとしては地域にかかるかなんかという事は僕は少し思っています。その事は問いかけをそれぞれの方々が持っていて、自然科学、社会科学と分けるわけじゃないんですが、まず、何を調べたら良いのか。とりあえず表面的なデータは取れるんですが、ただし、一歩踏み込んだことまでいきたい。それが最後に言った立場とか、パースペクティブの問題だと思うんですが、それをそれぞれの方々、モノづくりの方々、その専門性の専門とは何かというのは今、議論が出てきたし、議論の中でも当事者という言葉も出てきましたけれど、そこからもう一回、学問と言うとまたちょっと言葉が違ってしまっているのですが、地域に根差したものを考えていく。

いろんな方がいろんな活動をされていて、あるいは農家、あるいは漁業者のお話も聞くのですけれど、そこでやはり皆さん、特に沖縄の人たちは自分たちの地域のことに本当に責任を持って考えていらっしゃるというのは印象としては持っています。だからそれをどういう形で表現していくのか、伝えていくのか、今回、特にスタイルというんですか、作法みたいなものを考えていきたいというのが、最初意図したことでした。研究のスタイルというか、ノウハウということよりか、スタイルみたいなものが変わっていくんじゃないか。変えていかないと、もう自分でやらなくちゃしょうがないという状況も含めてあるのだろうと。

二日間にわたりまして、本当にありがとうございました。

宮 城： 二日間どうもありがとうございました。(拍手)

(司会) 最後に、お願いがあります。こういうフォーラムをやる前はその意義などを新聞記事に書くんですけど、それがどうなったのかは参加していない人はわからないですね。ぜひ皆さん、この会がどうであったのか、どういう意義があったのかというのを書いて新聞にどんどん投稿して下さい。20ぐらい出れば一つぐらいは採用されるんじゃないかなと思いますので。文芸欄をこれで占めてしまうぐらいの勢いで。終わった後どうなったのかというのはきちんとそれぞれで文章にして、できれば地域研究所にでも送っていただければと思います。

最後に、事務局が非常に大変だという話が出て、非常に嬉しかったのですが、ここにいる皆さんは、こういった研究なり、活動なりをやる場合に結局は事務局なんだということを一番おわかりだと思います。今回のフォーラムも事務局が一番大変でした。もし二日間のフォーラムが成功だったとしたら事務局のおかげだと思いますので、特に中心になってくれた福田さん、あと学生、卒業生、アルバイト、そしてトヨタ財団のお二人、喜田さん、田島さん、どうもありがとうございました。(拍手)

ということで、二日間のフォーラムを閉めさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

### ラウンドテーブル出席者

崎山正美	(司会/フォーラム企画委員会/循環型社会研究会)
宮城能彦	(司会/フォーラム企画委員会/沖縄大学地域研究所)
長田栄巳	(フォーラム企画委員会/渦の生態史研究会)
家中茂	(フォーラム企画委員会/沖縄大学地域研究所)
喜田亮子	(フォーラム企画委員会/トヨタ財団)
蟹江宣雄	(トヨタ財団常務理事)
龍澤	(トヨタ財団)
比嘉政夫	(沖縄大学地域研究所)
朝岡康二	(県立芸術大学)
池口明子	(渦の生態史研究会/報告)
山下博由	(渦の生態史研究会)
三輪信哉	(循環型社会研究会/報告)
山本耕平	(循環型社会研究会)
干川明	(石垣島ほしかわ農場/報告)
砂川かおり	(沖縄環境ネットワーク/報告)
藤本治彦	(沖縄県立八重山農林高等学校/報告)
藤田喜久	(琉球大学教育センター/報告)
孫薇	(沖縄大学/中国琉球資料/報告)
伊波香織	(中国琉球資料)
与那覇晶子	(沖縄大学/じゅり研究会)
真喜志きさ子	(じゅり研究会)
植木ちか子	(琉球・沖縄の服飾文化研究会/報告)
町田繫子	(琉球・沖縄の服飾文化研究会)
粟国恭子	(沖縄の紙を考える会/報告)
安慶名清	(沖縄の紙を考える会)
宇根悦子	(阿波根昌鴻資料調査会)
鳥山淳	(阿波根昌鴻資料調査会)
嘉田由紀子	(京都精華大学)
平松幸三	(京都大学)
藤井晴彦	(琉球湿地研究グループ)
平良次子	(南風原文化センター)
上田敏幸	(あおぞら財団)
宮内恭介	(カツオ・かつお節研究会/北海道大学)
赤峰淳	(カツオ・かつお節研究会/名古屋市立大学)
岩崎まさみ	(社会アセス/北海学園大学)
鯨京正訓	(名古屋大学)